

ヴァチカンの銀行の刷新

ヴァチカンには銀行がある。正式名称は ISTITUTO OPERE RELIGIOSE (宗教事業協会) で、略して IOR と呼ばれている。IOR は 1942 年法王ピオ 12 世の時に創立された。完全な独立法人であり、法王庁の一部ではない。審査委員会は、国務省の長官を頭として 6 人の枢機卿によって構成されている。現在の長官はベルトーニ枢機卿だが、近々に代わる予定である。

銀行の総裁に当たる人はこの審査委員会によって決定されるが、在家の信者の中で、イタリアのあちこちの銀行の総裁を務めたり、あるいは高職について経験豊かな人が選ばれている。今でこそヨーロッパは、EU として一つの国のような機能を有しているが、以前は多くの国家として完全に独立していた。その中には、ヴァチカンやサンマリノ、リヒテンシュタインというような小さな国もあり、それぞれに独立した銀行を持っている。世界の投資家にとって、どこの国のどの銀行に秘密裏にお金を預けるかということは、大きな問題だった。スイスなどは預金者については世界に向けて徹底的に守秘義務を果たしており、そうした投資家にとっては安全な場所でもあった。それが EU の透明化政策によって、スイスも「安心な国」でなくなりつつある。そのあとに狙われたのが、ヴァチカンの IOR であった。

IOR の預金者は、宗教家 (この場合、カソリックの神父たち) やヴァチカンの住人、勤務者、そしてヴァチカンにある各国大使館に勤める外交官と決まっている。実際は、裏の逃げ道などがいくらかでもある。こうして IOR はダーティマネーが集散する所となった。

この IOR を仲介して、暗躍したり、対立したりする者も出てくるようになった。20 年以上前になると思うが、IOR に深く踏み込んだイタリアのアンヴロージョ銀行の総裁がロンドンのテムズ川で首を吊った状態で発見されたことがある。この事件は自殺として葬り去られたが、今でも真相は明らかではない。このように IOR を介して、数多くの事件が起こっている。特に 2011 年から 2012 年にかけては、ヴァチカンの法王の機密文書が外部に漏洩する問題が起こった。ヴァチカンではその首謀者を「カラス」と呼び、IOR も怪しいという目でみられるようになった。そのために 2012 年 5 月 24 日には、2009 年から 2012 年まで務めた IOR の総裁が、ヴァチカンの審査委員会によって罷免されている。

現在の法王は IOR の改革に乗り出した。銀行が宗教事業の純粋な推進母体になるように組織の改革を行った。ヴァチカンの銀行であるということで、外部の人に任せないで、教会の関係者自らがその任に当たるよう、審査委員会の総裁には枢機卿のラファエレ・ファリーナ氏を、その秘書には大司教のピーター・ブラウン氏を、また司教の相談役としてファン・インシオ・アリエタ・オコア・デ・シンシエトル氏、さらに法王の信任が厚い枢機卿のジャン・ルイ・ドランや経済専門家のメアリー・アン・ブレンドン氏をそれぞれ任命した。

このような刷新の最中に、IOR がらみの事件が起き、高位聖職者が 6 月 28 日に逮捕されたのだった。スイスのルガーノに

ヴァチカン名義の口座があったが、実はこれはイタリア・サレルノの船舶会社に関連する口座だった。事件は、その金をイタリアに持ち込もうとしたところから起こった。その額は 4,000 ユーロ (日本円で約 5 億円) にもなるという。それがイタリアの財務警察に見つかってしまい、聖職者の逮捕に発展した。さらに彼に協力した内務省の警察官やブローカーたちも捕まった。この時に逮捕された高位聖職者は、それまでどこに行っても支払いには、いつも 500 ユーロ紙幣を出していたので、「Mr.500 ユーロ」と呼ばれていた。

ヴァチカンは節制路線に

現ローマ法王は、特に若者に対して、世間の風潮に流されることなく、神の道にためらうことなく突き進んで欲しいと述べている。

そのような思いを自ら示したともいえるような例がある。6 月 22 日に行われたパオロ 6 世ホールでのコンサートには、法王も出席する予定だったので、法王用に大きな白い椅子が用意されていた。しかし、法王は別の用事があるとのことで出席できなかった。用意された白い椅子は、最後まで空席のままだった。神様の御用がある時には、勇気を持って、神から与えられた道へ突き進んで欲しいという。

また、歴代の法王が大きな金の十字架のネックレスをつけていたのに対し、現法王は昔から使っていた鉄の十字架のネックレスを身につけている。法王になったからといって、習慣を変えることもなかった。自分たちの法王がそのようなしているので、枢機卿の中にも、そういう空気が立ちこめ、鉄の十字架のネックレスを使用する人が増えてきている。

あるいは、現法王は前法王までが住んでいた専用の宮殿を使っていない。彼は住居として、ヴァチカンに来た枢機卿や司教たちの常宿であり、またコンクラーベの際には世界から集まってくる枢機卿たちの宿舎として使用される CASA SANTA MARTA を使っている。そこから動くことはないという。彼の部屋は 201 号室で、質素なベッドルームにソファのある応接室、そして簡素な書斎があるだけだ。1 日の 3 食ともその建物内にある普通の食堂で取り、その時々を訪れる司教たちと席を同じにしている。法王はそのことに対して、そこにいる方が世の中の動きが分かり、また多くの人やさまざまな人と話ができることは、プラスとなると述べ、また孤独を感じることはないとも言っている。

法王の日課は、毎朝 4 時 15 分に起床し、5 時から 1 時間の個人のミサを行い、朝食をとり、それから 1 日の活動に入る。夕食は 19 時 30 分。就寝は 22 時となっている。

法王はその応接室で、ヴァチカンを訪れた世界の要人とも面会している。3 月 19 日には、出身地のアルゼンチンのクリスティーナ・フェルナンデス・デ・キルチネル大統領と歓談し、その食堂で一緒に食事をしている。また 6 月 15 日には、EU 委員会のバローゾ総裁とも会っている。しかし、各国の大統領や首相がヴァチカンの国賓として訪れた時には、やはり今なお法王庁にある宮殿の書斎を使用している。